

も撫によって仕上げられている。平瓦の一部に、須恵質の焼成を示すものがあるが、ほとんどが、表面を黒灰色に焼した瓦質のものである。他に瓦質の磚の小片がある。厚さ三・五センチを測る。

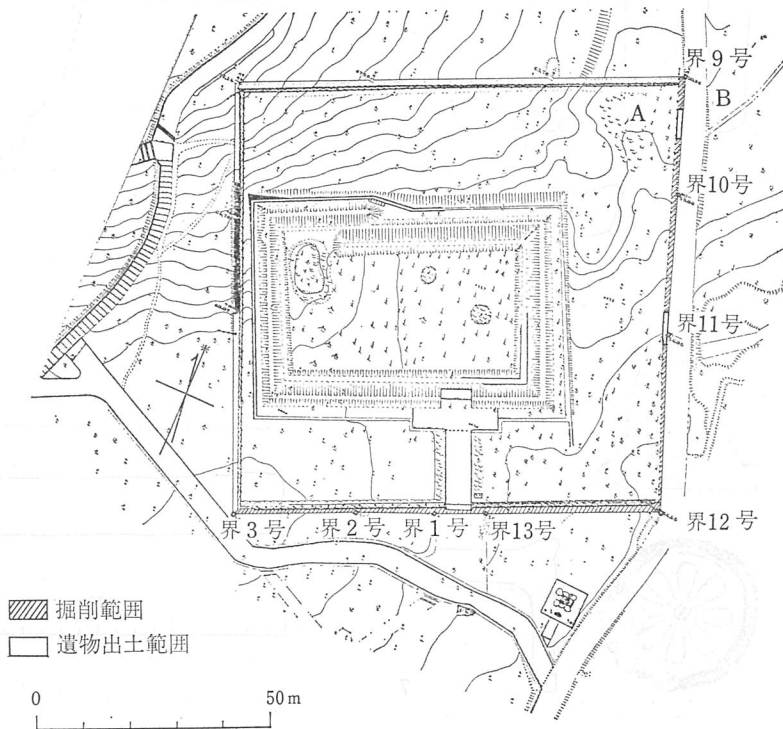
(舟瀬利昭・福尾正彦)

後嵯峨天皇以下三方火葬塚外構柵改修工事箇所の調査

後嵯峨天皇以下三方火葬塚の外構柵改修工事を行なうにあたり、昭和五十七年十一月十六日から五十八年一月二十九日までの施工期間中、立会調査を実施した。

工事箇所は、火葬塚境界線上の南側八七・三〇メートル(界一二号～界三号)と東側九一・八〇メートル(界九号～界一二号)の境界線上で、二メートル間隔に、長さ〇・六メートル、幅一メートル、深さ〇・六メートルの掘削が行なわれた。立会調査の結果、何等の遺構も検出されなかった。

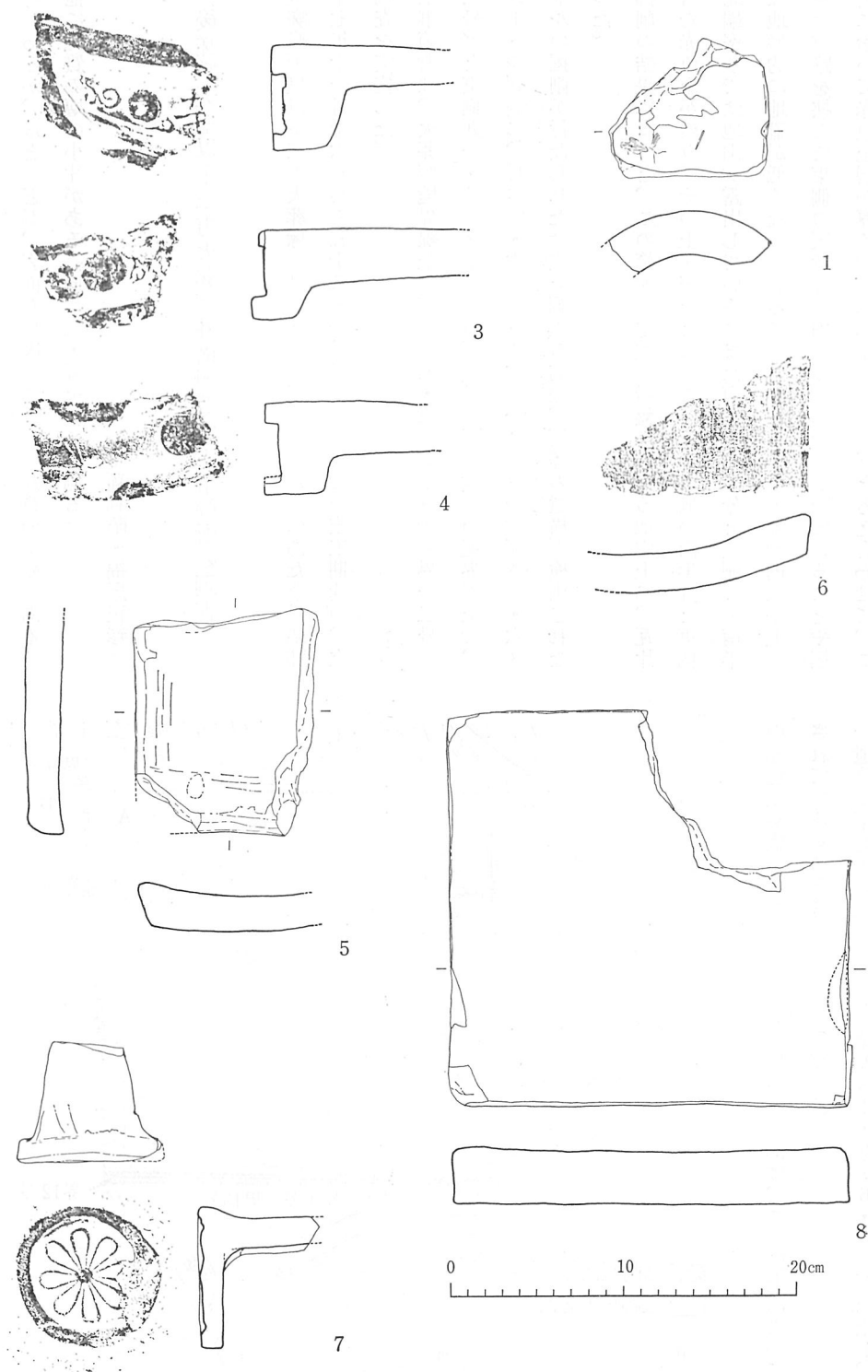
掘削の結果によると、この箇所の地盤は岩盤からなる地山上に、瓦片を含む赤色土がのり、その上が表土となっている。南側の西半分と東側の北端寄りでは地山が露出している。また南側の東半分と東側の約南半分は地形的に地盤が低くなっているにもかかわらず、火葬地内は平坦である。道路を挟んで東側の天竜寺境内が極端に低くなっていることや掘削内において赤色土層が厚く、地山に至らない状況と考え合わせて、こ



第22図 後嵯峨天皇以下三方火葬塚立会調査箇所の位置 (1/400)

の赤色土が盛土であり、本火葬塚地の東南部は、この盛土によって整形されているものと考えられる(第22図)。

遺物は東側から瓦類一五点(第23図1・3・6・8)が出土し、境界



第23図 後嵯峨天皇以下三方火葬塚の出土品 (1/4)

内北東北隅のA地点から一点、隣接する天竜寺との境界付近B地点から二点(2・7)の瓦類がそれぞれ表面採集された。その種別は、丸瓦二点、宇瓦四点、平瓦九点、棟込瓦一点、埴一点、鬼瓦と考えられるもの一点である。

その主なものは、次のとおりである。

丸瓦(第23図1)

筒部か玉縁部かの区別は不明瞭である。径は小さい。凹面に細かい布目痕が残る。側面は篋削りされ、さらに下縁を面取りしている。凸面は篋削りの後、撫で調整を施す。また、部分的に刻目や刷毛目のような痕跡が残る。胎土はやや粗く、焼成も良好とは言えない。色調は凸面が黒色、凹面が灰色を呈する。

宇瓦(第23図2・4)

三点とも瓦当正面に日輪あるいは月輪を表わす円盤を有しており、2と3には雲文が伴っている。さらに2には「寺」の一字が残っており、寺名も施されていたことが分る。頸部は三点とも浅頸である。頸部から凸面の一部までに横方向の撫で、それ以後に縦方向の撫でが施される。凹面は2・3が縦方向の撫でを施し、4は不明瞭である。胎土は砂粒を含み、やや粗い。焼成も良好とは言えない。色調は黒色を呈する。

平瓦(第23図5・6)

二点とも広端面か狭端面であるのか区別ができない。5の凹面は端面寄りに横方向の撫でが施されている。端面および側面も撫で調整されて

おり、端面上部に丸味をもたせ、側面上部縁は面取りされている。凸面にはかすかに糸切り痕が残る。6は凹面に細かい布目痕残り、側面寄りには縦方向の篋削りがなされている。側面も篋削りされ、凹面側縁部は面取りされている。凸面は糸切り後、篋削りがなされている。胎土は粗く、焼成もやや悪い。色調は灰色を呈する。

棟込瓦(第23図7)

瓦当は薄く、単弁八葉の菊花文を内区主文とし、中房は小さく低い。瓦当部と筒部の接合面は凹凸両面ともに補強の粘土を張り、凸面には縦方向の撫でを施している。胎土はやや緻密で、焼成も他に比較して良好。色調は暗灰色を呈する。

埴(第23図8)

平面形は正方形を呈する。表面には撫で調整が施され、裏面には糸切り痕がかすかに残る。側面は一部に布目痕が残るが、調整痕は不明瞭である。胎土は粗く、砂粒を含む。焼成もやや悪い。色調は暗灰色を呈する。約二三センチ四方、厚さ三センチ。

(小畑 実・佐藤利秀)

佐保山東陵山裾崩壊復旧工事箇所調査

聖武天皇皇后天平心真仁正皇太后の佐保山東陵の東側崖地の一部が、五十七年八月の台風により、地滑りを起した(第24図)。多量の雨水が浸